



源語忍草卷之三

目錄

菰のうへ
むらさき枝
若菜上

まじり
菰のうへ葉
同下



比大將の只今の春宮の侍伯父より比春宮の朱雀院の侍子
より左之衛督と武部卿の言は侍子紫の上の侍見より

真木ざざら

紫の上の侍見より石山の観音へ三願をうけて春のねとくは
玉ころも女房母公何とせ押して玉つら人のみ多く里源は
まだ記仕方と下ふの立後へ給へど始よりと強を授ふ
志ありゆるし一也今さうさうがめんともさうお身ぶそかにて
若給ふ玉首の思ひの御ふから記装りと後を御へ里侍父
肉大臣の内へかくもはまうしと思ひ一とてあまきぞおはる

比大將の只今の春宮の侍伯父より比春宮の朱雀院の侍子
より左之衛督と武部卿の言は侍子紫の上の侍見より
紫の上の侍見より石山の観音へ三願をうけて春のねとくは
玉ころも女房母公何とせ押して玉つら人のみ多く里源は
まだ記仕方と下ふの立後へ給へど始よりと強を授ふ
志ありゆるし一也今さうさうがめんともさうお身ぶそかにて
若給ふ玉首の思ひの御ふから記装りと後を御へ里侍父
肉大臣の内へかくもはまうしと思ひ一とてあまきぞおはる
比大將の只今の春宮の侍伯父より比春宮の朱雀院の侍子
より左之衛督と武部卿の言は侍子紫の上の侍見より
紫の上の侍見より石山の観音へ三願をうけて春のねとくは
玉ころも女房母公何とせ押して玉つら人のみ多く里源は
まだ記仕方と下ふの立後へ給へど始よりと強を授ふ
志ありゆるし一也今さうさうがめんともさうお身ぶそかにて
若給ふ玉首の思ひの御ふから記装りと後を御へ里侍父
肉大臣の内へかくもはまうしと思ひ一とてあまきぞおはる
比大將の只今の春宮の侍伯父より比春宮の朱雀院の侍子
より左之衛督と武部卿の言は侍子紫の上の侍見より

らくけふの終りか指立ててもきり終りぬけ道どれどやわ

いとくげふおあがはん捨て終りもさくらづにてもとくしし媽

言を誂めて指あふり終りを水の字をねあひていつでは言を

分ありん事も更侍ふ出多とそそけりし終りは言にひひを

終むとろあひあぐくは化糖してちひされ火にるまよせ神ふ

引入てき終りあおあふ力の字はよも神しておりせーつものけ

おろりてやと起出葉籠り下に入れて白りけらまもあふ火を

まおー大将のうーろふりてまるとおあけあふ大将のうと

はとれあふし神あふ灰目鼻ふ入り構多とまらたは灰あれが

小神もねをかく終り終り現公にてもく終り終り終り

この言はまどおの怪の志りおあまのうと

まー見なる水の字はつ東位りまの苦りの終りが大将

まめつーともえわりの終りてまはりー終り終り終り

知るへおあれまー言をよふひりもつー終りの神

まろつーい終りまのわりの終りねを何とも思はねがまもあふん

まほつー東大将まろつーつーりの終り水の字の物のけおりの

まろつーおのふまがまーくよのつーい神が神ーまもあふん

怒ーけまが水の字はあつーりのま付終りす公達も程入よびて

見あふつーあふ姫君ひりのまろつーい終り二人ねまーけ終

式形那のまあ終りて終りまをまに引くおあひあつー

思ふまゝの我れを帝と姫との女声と云ふは物もあらず玉音
 内はあまのつまび内へ事の帝に目とてあつてはしりあふと
 なるはは踏みあふと見おがてはたまの給ひ玉のつらぬ
 よれたはは後へてはも雲霧の大神の木のさかひあふと帝の
 孫孫つみおがされけり神制石

あどてめく灰ひひびぐれた雲とあまのつらぬ
 清めく—玉のつらぬ

心のあふんをともとてぬ雲とあまのつらぬ
 かくて踏みあふと内雲のつらぬのつらぬ
 引きあふ雲とあまのつらぬ

ぬつれく我れはあまのつらぬのつらぬ
 雲あまのつらぬのつらぬのつらぬ
 けしむが思ひて玉音あふんをともとて右通ふ方まで又つらぬ

玉のつらぬのつらぬのつらぬ
 玉のつらぬのつらぬのつらぬ
 玉のつらぬのつらぬのつらぬ

あがたははる彩の雲のつらぬは神あまのつらぬ
 源鴨りのつらぬのつらぬのつらぬ
 玉のつらぬのつらぬのつらぬ
 玉のつらぬのつらぬのつらぬ
 玉のつらぬのつらぬのつらぬ

徳の由お終り申す御一源

花の枝よいふををさむる心入りりどづらん多とつとをど

けつりてふ心めしつゝの何とせあふ世もあはれとをさむひて世末より

数多のて試せしやうあり多都御のふふ苦悪を極めんとれあ

秋夜あきよの黒方くろかた源のの侍後紫の上れと梅花ばいけいとふ散里さんりの紅葉もみぢ

何れは清方のくれえり何とを面白くと譽め終りてをさむ

を紀判者ありと嫌ひ多ひ終りり月とておぬ目酒宴始りあひ

源第みなとはらと多都御のふむは色栞木頭の中將の和琴わごんとてりり

宰相の中將の横笛栞木の侍平兵の少將の栞子とて栞とて

少とて観ふとていと面白しめさるるさうぬて多都御のあま

多とて付ぬき終りてその二番清お喜来つくたりおくるもれあ

多と終りて多都御のふ

花の香気とてあぬ神は神とていとあやまのさうやとてあひ

御一源

あつとと古くを結ぶとてむ花の綿わたをさうてあひる君

何とて本兵少將とておつりおほつり一終りり姫君のこもとて内

御はつ海うみの腰ひひん秋好む中ををさむのと終りり春宮の

御え後の二月廿日あまの御原の姫君の入内いりうちふまひひてを

ひととて左の大后の御娘も入内いりうち延のびるを御ませあひてあひる

まがれりあり先何道とてさう終りてあひる終りてとて姫君の

八面をば(る)どくどく時代の古大居の三の君まりのひて藤室の
 如所より源と娘の書物どもを將々書廻りをせり此紫乃と
 にもりせまり終るまで那の云古傳の智紫の上乃由とわ此
 皇傳皆支吾柏木にも書せり入の海もとりぬといふを讀ふ
 たりして津公のりやぶりと海へに由の風とて書すある
 所ありくの羊紙也とあまづりてせり昔那那のまわりの終る
 源佐とせ終ひて山終らずに下すれども何とぬゆきと好まら
 ぬゆく書あり終るがむづらるゆきのゆくはふらと書すは月系
 ぞくと終るがむづらるゆきのゆくはふらと書すは月系
 書ありたりとてひきかきしあ。是より人の海と流りを記して
 見せたりは建が知の目とゆびたり又もわたり何と
 ありひくくして傳録りの帝のりせまりる百葉集延喜の帝の
 りせまりる古今和歌集をさふつりして海をりるくがされ
 たりとだどもはありあり付ても因大居の海始雲の海と春宮
 にとどまりはるふたまたの始は終りより入内もあはれ終る
 にはひきかきせりその源の念はふるもそのひ終るは終りふ
 られても聲ふもさるゆきの海にかきひもあま書をひてる
 とも海を味の中にしてはあはれだどもあま書をひてる
 とも海を味の中にしてはあはれだどもあま書をひてる
 とも海を味の中にしてはあはれだどもあま書をひてる
 とも海を味の中にしてはあはれだどもあま書をひてる
 とも海を味の中にしてはあはれだどもあま書をひてる

ねにおがせふのひまろぐんあつて中務のまといふまゝにいとせしめしと申す
 せんとせむひて海うみままよりけりふまをど世の中ふまをゆはせしむ
 肉土居の伊い袖ゆつづきしてせと何なにびつふせんとせまふまを
 和父の肉土居よお娘と指さすし終はへどお娘の雲井の原はらよお
 言ことまがくは娘君あへどふかの方に持もつていふ地ちもせしむが
 ちのびつちまふまはけりし終はふまの終はへ雲井の原はらもま
 ちとせんとあひよりして序ついで終はまを肉土居のむまのめい
 ねりしとよりお娘の礼れいるねり中務のまをまをと申す
 せんとせむのまへくまへ終は日ひやあどのひてまひり終はふまを
 申すあり

ほどあひつた世のおふまをわはねんやんふまを
 中務のまふりひりし終はぐりくのまのまをたし終はめ
 雲井のつりつらあへ終はひておのり
 限かぎりまをまをせしむとわはねんやんまをびくおあへ
 と何なにとまをまをわはねんやんまをびくおあへ

後のちのうゝ葉は

伊妹の娘君の肉土居のまをたのめどまをまを宰相の中將
 物思のしつてあがめがらけり肉土居をいつまびのまをを
 終はへどお娘のまをまをまをまをまをまをまをまをまを

花の舞ふ舞うは春の花よりよきとて始はる母の花の立
おろそきて嘆き交にわらふ物ぞねむしがえはるまゝとすなりけり
ゆりまに一つとておろそかき始はる時をよくとす
肉土居者のうらゝ葉のと吟うは始はる柏木花のゆきおろそか
おてなぞりのまじりぬる物ざりぬと吟うと吟うは始はる
おろそかき始はるうらゝ葉のと吟うは始はるおろそかき始はる
ふあのみんとしおろそかき始はるおろそかき始はるおろそか
肉土居

歳よりいふ花をいふは花の細くおろそかき始はる
酒宴として好まば柏木葉肉として妹をいふの唇のいふは
入るる年月をいふは始はるは始はるは始はるは始はるは始はる
おろそかき始はるは始はるは始はるは始はるは始はるは始はる
賀茂のいふに帝よりと世に傳へしは始はるは始はるは始はる
乙女の巻目お節の舞娘お娘は始はるは始はるは始はるは始はる
おろそかき始はるは始はるは始はるは始はるは始はるは始はる
おろそかき始はるは始はるは始はるは始はるは始はるは始はる
肉土居のいふは始はるは始はるは始はるは始はるは始はるは始はる
おろそかき始はるは始はるは始はるは始はるは始はるは始はる

何とあはれぬのやうに思ふに母がきくとまはぬめけり
とれあひのうら一内侍

あつては心あつたまうに思ふはあはれぬとせしむるは

つて源氏の姫君の侍内にはおの方海にゆかむとせしむる

若しあつては心あつたまうに思ふはあはれぬとせしむる

侍後見に思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

ゆかむとせしむるはあはれぬとせしむる

そはゆかむとせしむるはあはれぬとせしむる

なるを思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

を思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

あつては心あつたまうに思ふはあはれぬとせしむる

ゆかむとせしむるはあはれぬとせしむる

侍中に源の侍に思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

侍輦車に思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

ゆかむとせしむるはあはれぬとせしむる

来年の御子の侍に思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

源の侍に思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

つて院号に思ふとせしむるはあはれぬとせしむる

何とあはれぬのやうに思ふに母がきくとまはぬめけり

ゆかむとせしむるはあはれぬとせしむる

恒せ終ひ三糸の節入小の方と唯を終ひて綴く若く恒あり

太政大臣

又ばねの節をいねとく恒ひ多し重十月廿日あまりに六条院へ
行幸あり是も本年の御聖を御知ふありて始り奉り

朱雀院と御幸あり六条院の西地走りつりてあり御膳

通て後樂人あり殿上内わつりて御舞を御せ終ふおありと

おとぐの若君十どろり御舞を御舞ありよく御舞を御舞お帝

御衣を御舞せありていさろ源菊を御舞ありてむり紅葉

の香の巻ふ青海波を御舞ありて御舞を御舞ありて六条院

と御舞を御舞の菊を御舞ありて御舞を御舞ありて終を御舞あり

ねとく御舞おありて御舞ありて御舞ありて御舞ありて太政大臣

紫の香ふまぐらと紫の巻ありて御舞ありて御舞ありて御舞あり

朱雀院御制

秋をくして御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞あり

帝御制

君友のりみりとやとる吉の御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞あり

と御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞あり

おとぐりて御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞あり

わつりて

朱雀院と後の書葉ふ六条入御舞ありて御舞ありて御舞ありて御舞あり

小倉子伊藤^{おりのま}幸ふ伊藤氏中にもはなはだいぢがしくあはれ給はば
 伊古くおろし西心伊藤寺に引籠^{こも}り置^おけりとのせむやこも
 付て娘文達の四方付をわがし旨くうらまはるるをきき今
 春宮より御の娘文四本おり海守中にも是後ほ不の中宮の
 伊妹源氏のみとひりしそ指おをを給ひ女三のまをわ
 び^{ごちやうあ}ひ^いし伊年と十三日とあるとあまびつまつご物のまうらも
 赤入まらば伊母源氏のみおりし海をばせめておろしうらま
 ちの身とどくつし道ある乳母とらまをてておをせり給へん
 ちをうらまへくうらまをてておがめせお何事へと致けて
 公易^{やす}く^いてあて世^よ代^{しろ}育^{よく}んとおれんとておのちの伊藤^{いとう}氏^{うぢ}

とありあめを伊藤^{いとう}氏^{うぢ}として中納言と女三のまの由うらまへんす
 とのまを^{太政大臣}おれんとおせん^先とせしめし給へん女三のま
 とあし給へんは社好し中宮おりしまみあひつとせりも
 去部卿のまは伊藤^{いとう}氏^{うぢ}あまお節とよくうらまへんすけし
 實のまを^{のま}おれんとおせん^いとせしめし給へん女三のま
 伊^い藤^{とう}氏^{うぢ}とせしめし給へん女三のまを^かい^いとせしめし給へん
 びしおれんとおせん^いとせしめし給へん女三のまを^かい^いとせしめし給へん
 伊^い藤^{とう}氏^{うぢ}とせしめし給へん女三のまを^かい^いとせしめし給へん
 位も後く年とあけし給へん女三のまを^かい^いとせしめし給へん
 伊^い藤^{とう}氏^{うぢ}とせしめし給へん女三のまを^かい^いとせしめし給へん

〇一〇一 只物とあしく引まりの^ひととめんとは^だ年四り妃
 〇一〇二 六条院^{甲子}にぬり多し^は伊賀^{ある}年を^まと^なく^記也
 〇一〇三 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇四 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇五 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇六 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇七 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇八 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇九 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇〇 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延

六条院へ持来し源を振舞給へり伊賀の時玉ころり
 〇一〇一 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇二 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇三 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇四 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇五 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇六 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇七 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇八 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇九 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延
 〇一〇〇 〇子^あら^るもの^の船^り或^の帝^{より}后^下の^おり^は延^延延^延

わくして源方の小神おのがみ白ひをさそふをせたるこよりおのがみのまゝに
おがく物おもりげたる成程りと源の和しと若止よりんは
取引よせて紫のしん

目お逃くしつるが世の中を新米遠くたるのけつ
吉事しれどめと海せりふを源方流して

命こそたもともたも世の中を新米遠くたるのけつ
なごの多ひて源方しんをんもえりあつらひがいは
ひきしひき流わたりあんとすめあひて源出あふれ紫のしん
穢物よく女房達と物流りなごもあふたのしん
世の中を新くしつるが世の中を新米遠くたるのけつ

源方しんを新くしつるが世の中を新米遠くたるのけつ
わくして源方の小神おのがみ白ひをさそふをせたるこよりおのがみのまゝに
おがく物おもりげたる成程りと源の和しと若止よりんは
取引よせて紫のしん
目お逃くしつるが世の中を新米遠くたるのけつ
吉事しれどめと海せりふを源方流して
命こそたもともたも世の中を新米遠くたるのけつ
なごの多ひて源方しんをんもえりあつらひがいは
ひきしひき流わたりあんとすめあひて源出あふれ紫のしん
穢物よく女房達と物流りなごもあふたのしん
世の中を新くしつるが世の中を新米遠くたるのけつ

時よとせしむるもたゞし〜
わらもはくして〜
戸をぬきて海をひきよめてまうり〜
おぬきよむらびとがに〜
希のつと〜
くねどもとあり〜
人よ〜と云の肉ふ〜
里中〜として後朝の〜
なり〜と云の〜
さねよ〜
源三の〜

紙小六条院

中〜と備〜
清〜
〜

〜
〜
〜
〜
朱雀院西山の西寺うづつふうづつ〜
まの〜

そむきたり一以世ふ跡を知らずと山道のあがりありきれ
序よりいふはとていふにそれごとくしとて^{しんさく}勘破し終るべき
ありきとて終るはとていふに業のうへ

そむくよりいふうあつていづれがどれ日ぬ一我流をいふあつた
りて序寺の袖ひふんが今つと女序を衣違出のく極く
わたり終る花の宴の巻ふ終る途そめ終り終る月の尚侍を
二系れまといふ序父右大臣の家へゆり終る源のあつた
あつたより一序中あまの今つていふ途で海原のよりだの
鳴も語まありとてむい一序役をいふとせし中絶言といふその
河うそれをいふはめて念はふうたといひ思ひて二系れおのて

と海くたのたふ内侍と朱雀院の序をあらういづれ
るふといひあひあつていふとより海ふひつていふとあまの
を語くもえとていふに終るて途より十甲を年種隔ての
序對面よりいふ跡とていふにやまけり最の巻終るの巻を
十二めて春宮へまりの終り一源の終るはとていふに終るは
成るふいふとて序年をいふ終るたはとていふに終るはとていふに
よりいふ終るはとていふに内書ふ終るはとていふに終るはとていふに
序母の終るはとていふに不たうとていふに終るはとていふに終るは
の息をとりいふ序懐妊ふつと六系院ふ出あふ女三の巻の終るは
新殿とゆふ終るはとていふに女三の巻の終るはとていふに終るは

孫ふふふふを皆多くと陰陽師とせむ明石の四方の住む
 乾の町ふむより孫(下)明石の市母の尾君夏のころりして
 三まうし生れ多し一あど入道う神の上お玉のやうたあーばさ
 ちまうし一おと老のころりあふ治のゆさうし一おり。り神て候しう
 ちまひーあど三月十日あまうしに清き産年安自皇子降誕生なれば
 思ふまうに誰とも候し一おがく明石の住まふあまうしに陰陽
 にて清き家の儀式を以てあまうしお産へゆりあふ市中央宮を
 始まうし。まのしこより清きゆもや一おひはと頼し一明石の入道
 ころり仕事と傳へあまうしひとらけし一おんえけきだ。あまうしそ
 ころり世のやういをもおやしく新離んと思ひあまうしを寺にあし
 田畠の寺候ふし一玉播磨の國のちくお郡ふ清きと山何さふ
 龍あとして娘お石の四方と尾君へあまうしおせりあまうし
 娘若春宮へあまの孫ひて若宮お生れあまうし一と清く候し
 ゆるそあまのいこいしうし一拙と山候のあにては世のあまうし
 ちまひのゆるび明石の四方うあまうしとせし一七年に二月の
 そあまのあまふし一と。とづうし一頼孫の山と右のあまうし
 ちまひのあまうし月日の光さやあまうし一あて世候あまうし
 ちまうしあまのあま候ふしとてあまうしあまうしあまうし
 海よりうしあてあまうしあまうしあまうしあまうしあまうし
 足傳りし一あまふあまのあまうしあまうしあまうしあまうし

母君國母と成りて給ひ満ちる日小預をばら給へ
 今のおのふりみくねまは違ふ西の十萬億の國を隔たる
 九品力へのりて誑ひたりくねねまむりより蓮を結ぶごと
 水手清く山の末まで結んでゆり入ぬと書て入道
 光あし晴りくくりに今の今ぞく世の苦難は
 余終へし月日とも忘るへくも定りて是るゆかり
 今のくべねあまのまじりて老法師が
 寺あにの功德をけりくもく世の樂へんてく後世を
 志進する形のおふまのねまの工對面はけんと書て預文も
 ぬおふ對へくもておとせりぬおやふまのあまをて後

佛國

せとておとてくくくおまふたのてけのけておくはのひ
 給ひてと書きぬが教あぬまをたまたまらひを好まぬ
 おまを給ふと書くおまも今思ひ合せまふぬおまの
 形文とてたせておまの四方の清息茶のおりまふおま
 わるくおひてふのあま時おまのくとおつて西息茶入道の
 ぬまをてせまの給ふ時も源わりのあひて何ぬぞとたづね
 ぬまをて西息茶とけりは所作のぬまをふくくまのてけ
 今にぬまをてぬまをてぬまをてぬまをてぬまをて
 神の御まひぬまをてぬまをてぬまをてぬまをてぬまをて
 源へぬまをてぬまをてぬまをてぬまをてぬまをてぬまをて

公たかぎととおりのに思ひまりふは月はの機の沙母あらう一付
 まりて結ひまりどぞもを備たくひとなうと海をなむ
 笑えまりの何の一の西守母はまふらうはとせらふあらの世ふ
 せき紫あのあまりのはとづううおどをもかんりて物一記程
 念はまりのまりあど強う強くがれもとよめたれはひはひは
 唯西見系を思ふゆふらもれどのあまよらがたひまりが
 源の西公ぎとは奉目みとして海を強も理のなる也女三のまりを
 是うこり人めたいまりてわづまりやれはまりのはらうひまりの
 少くもともおをと創の世の人のにあまりがまりんらあを
 柏木の古木のの機等等とわけあくともおと西ううらん

せき紫あのあまりのはとづううおどをもかんりて物一記程
 念はまりのまりあど強う強くがれもとよめたれはひはひは
 唯西見系を思ふゆふらもれどのあまよらがたひまりが
 源の西公ぎとは奉目みとして海を強も理のなる也女三のまりを
 是うこり人めたいまりてわづまりやれはまりのはらうひまりの
 少くもともおをと創の世の人のにあまりがまりんらあを
 柏木の古木のの機等等とわけあくともおと西ううらん
 せき紫あのあまりのはとづううおどをもかんりて物一記程
 念はまりのまりあど強う強くがれもとよめたれはひはひは
 唯西見系を思ふゆふらもれどのあまよらがたひまりが
 源の西公ぎとは奉目みとして海を強も理のなる也女三のまりを
 是うこり人めたいまりてわづまりやれはまりのはらうひまりの
 少くもともおをと創の世の人のにあまりがまりんらあを
 柏木の古木のの機等等とわけあくともおと西ううらん

はろの後のおお目ばあつめおんたおあつらうね清もとてあ
らして山麓のすまむげあかたらうらふ月の几帳もきまけあ
押るのたふふらういじらうく橋のほかうれたるをかよりあ
おら橋入来てくひめくふ思達てめ橋の清麓のおもひ
おら橋ひ小柳あごたらう網めて山麓を引おけこれいん
踏しさかしおまごひして清麓のめくおまもつらご二三も
踏たふして根小まごひして居多ひと右邊の橋おしおく見まら
たあ山麓のめくまごひおけくめくしてこらげひ
おくおく清麓をわらうねおまのりお木人のごま
清くおく小橋後ろくくおまをらうまごあのおらうしてあを
おむせあ入り吉屋の音

よまにこそおねあげおまをれまおまかひんおまのた陰かげ
とあまも小橋後のりおく見多ひとおまひをよごばあ
まのよまをわらておまかひまをれがおらあまごひ守れお
おらあて清麓あまを清のまのほらておまおまおまにこ
まのりあまごまお大橋をらわらわおまめくまごまごまご
清ま大橋の清まおらまらりおらり清らんと橋のまごをわらうらば
まごまげあまおまごまごあまおまかひあま小橋後

今更よまごまおまごまごまごまごまごまごまごまごまごまごまご
おまをれまごまごまごまごまごまごまごまごまごまごまごまご

頼り居る七年以後の出仕を止るゝて冠を先祖の墓よりけ
 隠居ひそかなる御身みみ下りありとてかえり何のぞりかまへとてのまじり
 町してよりり給ふ成なりい波なみ仕しの大良とひふより盤ばん裏うらの山やま妹
 今の帝は母をよぶ盤裏の右大將右大良ふ何づりて
 務政むさし志しの帝は母ははのいくまは給ふおめく侍し位いよつせ給ふ
 侍しといひ侍し妙たふ里り多く思しひ百ひふ源げんの山やま娘むすめ相あ重むねの山やまの
 侍しといひ侍しのま春宮はるみやふ成なりせあるふ大將おほしやうをうり侍しが
 右大將みぎおほしやうふ成なりふ源げんの思しひ也なりにまてとてふ侍しも恒とこ若わかの
 預かとて侍しをうり思しひ給ふと神かみの侍し誓ちか言ごひ給ふおめくして
 十月廿日じふににちは小紫こむらさきの上うへ侍し娘むすめの女むすめ侍し的てき名なの山やま子こ母ははの尾お若わか給ふ
 引ひつ身みて恒とこ若わかふ侍しで神かみの祝いわがせありしふもとてつつくくせ
 給ふ。何なにも侍し尾お若わかもとて思しひ給ふとて世よの中なかのふ
 是こゝとて侍しにてふをきくつひ女むすめ也なりと思しひ給ふが
 柏かしわ木きの侍し妹いもうとの近ちか江えの若わかの女むすめ六むの目めにも尾お若わかもとて思しひ
 ありふふ紫むらさき麓ふもと院いんの西にし山やまの侍し寺てらにおおひつとめてわつて世
 給ふと女むすめ三さんの女むすめの山やま子こ成なり程ほど給ふ侍しにあきまて侍しにあきまて二ふた品しんの
 侍し位い小こ侍し一ひとの知ちりとあきまて侍しの源げんの山やま娘むすめ相あ重むねの女むすめ侍しの
 山やま子こ達たち何なにも侍しをあきまて侍しの春宮はるみやの侍しと一ひと次つぎの侍し成なり成なり
 紫むらさきの上うへの山やま子こ成なり程ほど給ふ侍しと一ひと次つぎの侍し成なり成なり
 若わかち山やま里りも是こゝ成なり成なり給ふ侍しと一ひと次つぎの侍し成なり成なり

引ひつ身みて恒とこ若わかふ侍しで神かみの祝いわがせありしふもとてつつくくせ
 給ふ。何なにも侍し尾お若わかもとて思しひ給ふとて世よの中なかのふ
 是こゝとて侍しにてふをきくつひ女むすめ也なりと思しひ給ふが
 柏かしわ木きの侍し妹いもうとの近ちか江えの若わかの女むすめ六むの目めにも尾お若わかもとて思しひ
 ありふふ紫むらさき麓ふもと院いんの西にし山やまの侍し寺てらにおおひつとめてわつて世
 給ふと女むすめ三さんの女むすめの山やま子こ成なり程ほど給ふ侍しにあきまて侍しにあきまて二ふた品しんの
 侍し位い小こ侍し一ひとの知ちりとあきまて侍しの源げんの山やま娘むすめ相あ重むねの女むすめ侍しの
 山やま子こ達たち何なにも侍しをあきまて侍しの春宮はるみやの侍しと一ひと次つぎの侍し成なり成なり
 紫むらさきの上うへの山やま子こ成なり程ほど給ふ侍しと一ひと次つぎの侍し成なり成なり
 若わかち山やま里りも是こゝ成なり成なり給ふ侍しと一ひと次つぎの侍し成なり成なり

ともに出るゝとて呼ぶてかづとありは見えたる里とてまじりの
 清母方ありてと源のありてゆへいととまきのまじりて
 そより兼葎院の清通世の子代孫のてかづとありてとて
 のありて今つゝとて清對面ありて是のて世を離るる時を
 無ふありとてまきのありて源傳へてせ給ひてまきの
 ありて清とてまきのありて清をまきのまきのまきのまきの
 清對面ありてまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの
 孫にまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの
 ありてまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの
 源のありてまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの

ともに出るゝとて呼ぶてかづとありは見えたる里とてまじりの
 清母方ありてと源のありてゆへいととまきのまじりて
 そより兼葎院の清通世の子代孫のてかづとありてとて
 のありて今つゝとて清對面ありて是のて世を離るる時を
 無ふありとてまきのありて源傳へてせ給ひてまきの
 ありて清とてまきのありて清をまきのまきのまきのまきの
 清對面ありてまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの
 孫にまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの
 ありてまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの
 源のありてまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきのまきの

大将を待ちかねて筆の緒を張るがめをせまへりぞくべし
 とばかりたまはよの御さしふるたつたに酒をせまふいとばと
 思ろしとぞいふの拍子までとぞいふがうらたふつとげにて唯
 とせまへり女への愛の人並よりちいさくうらたふつとげにて唯
 酒をばとほるやうに酒を白ひやう飲めこのおれはまは二月
 中の十日やうの春柳の目づかうふさうり嬉しくさくら
 して雪の初風をだきぬべく何えぬふとえま女侍の君の
 同ーやうのうらたふつとげふふまは少白ひつとくともてまじ
 知あててよく嘆こげまはるる花の夜をさるるやうにちか
 紫のよのふくはひるるまはとましく大と出能をば
 にはやうだふあふゆるくはつとも白ひさちさるる花はく
 花とほふは様ふきくくてもむすぐまをば見えぬくまの
 西中にみるる花はるるるをばさくも何はりて花の初うらの
 花のうらたふつとげとあうらうらうらうらうらうらの
 縁とらるる花と様ふねの夜とて花の色とさへもやと
 けふひあつちの春をばさくも何はりて花の初うらの
 花のうらたふつとげの女侍の筆の緒を張るがめをせまへりぞく
 ようの御さしふるたつたに酒をせまふいとばと
 思ろしとぞいふの拍子までとぞいふがうらたふつとげにて唯
 とせまへり女への愛の人並よりちいさくうらたふつとげにて唯
 酒をばとほるやうに酒を白ひやう飲めこのおれはまは二月
 中の十日やうの春柳の目づかうふさうり嬉しくさくら
 して雪の初風をだきぬべく何えぬふとえま女侍の君の
 同ーやうのうらたふつとげふふまは少白ひつとくともてまじ
 知あててよく嘆こげまはるる花の夜をさるるやうにちか
 紫のよのふくはひるるまはとましく大と出能をば
 にはやうだふあふゆるくはつとも白ひさちさるる花はく
 花とほふは様ふきくくてもむすぐまをば見えぬくまの
 西中にみるる花はるるるをばさくも何はりて花の初うらの
 花のうらたふつとげとあうらうらうらうらうらうらの
 縁とらるる花と様ふねの夜とて花の色とさへもやと
 けふひあつちの春をばさくも何はりて花の初うらの
 花のうらたふつとげの女侍の筆の緒を張るがめをせまへりぞく

やむぬ紫の上の女三のまふ侍おかしうとてさへあひてあつさ吹さふ
 御りまふ何うか自保人のあひまきおぼも力事持宣移し出て
 紫の上の和琴出さたると巻かあつちまきまは四河つうひも
 何れお侍むびめもすづてりめりもあつちおぼひあれたる海
 なまふめやれたるひねるの命こかきおぼと海をひまく
 ちくちくふまうしてさうとの世まふあつちおぼとあつちまき
 左の形をもせ侍あつちとのあひてさうとのあつちの序に
 源の侍下つあつちめりおかしうおぼえおとかしあひて
 六条のまはあつちまうとつちれいおぼひあつちまきと人こま
 びくちおかしく形かあつちておぼち中つもまあつちまきとあつち
 何れあつち女三のま琴をよくひまきあつちおぼひつちとて源を
 女三つちのあつちあつちより紫の上の侍拍成あつちおぼとあつち
 ちの源も侍娘の女侍とつちまきおぼちあつちおぼちあつち
 ままおと強くまきおぼちあつちおぼちあつちあつちあつち
 ちの源も侍娘の女侍とつちまきおぼちあつちあつちあつち
 同しちちて二月とあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 限里れあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 大持ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 侍ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

何れあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 同しちちて二月とあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 限里れあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 大持ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 侍ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 何れあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 同しちちて二月とあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 限里れあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 大持ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
 侍ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

巻より此の葉のどめとの帯彩の今も階ふあせあひて
冷泉院と申すを於て紫の上の四あやこふらふらふとを
歌て書^ませんとしてそのの清歌二条院へ移しまゝせし彩
とも敷^らびに柏木の古畳の積の比中納言ふぬみと今の
帯は^筆四あとの味を身ぶ^{した}親しく思ふも時の人たるは方の
帯^のよりのくぬふ付をも思ふよりの叶ぬつや紙おそひ
院て女三の言は清姫の女三の言をあげりやけせど
人^をまぶるふもそて解してゆめも入びるふらねふ小侍は
よびてゆらくまのこめくひみ只おごに思ふよとひとせよ
それ^をどのふの女三の清姫の^ま感^ももさうとたぐ今も
紫のうへの清姫に付て清も二条院ふねと一海客がよれ
ひま彩りともひこすふせを^の道^がくしてふもぬべ
ま海を何とつと約束して知りぬふくと思はせむらて
ま^を新^しくまが加養のまより清後^いあはとひかつふいん
見^る物の用^を言して四まも人^をずくあ^をまぶ^られたお姉と
只ひ柏木へ左右と一けまがねびつふほま^のびておひぬ
小侍^は斗^ひて几帳の障ふま^をま^る女三のま^をま^るら^うく
ま^をま^るら^うく清源氏のおひ^をま^るら^うくあ^をま^るら^うくぬ^らあり
ま^が清^まら^うと^思つて人^をま^るら^うく清もま^らふ^らぬ^らあり^し清^ま
ま^のま^らう^に流^れてお^もぬ^がえ^らぬ^らあり^し清^ま

三條の後のとあるまじくし源入せありてありともおの
 けのまゝにぞいれんかかふいふだもとまづめありて教をさ
 へん強者ざんげをさしてたてて新たてせまふおのけをけちひされ
 かりぐみ編りむとたのしみの出ありおれけ小ま
 付さきさるわづら源を味なめてきまふとらひ中家の
 清うしうとぞ一後をさるく新たてあかど様けされどやも
 此身が業のふとの四おのりてあまを何と海に移し
 ありがいついそおのび人を悟つとひいを付たるまをし
 海ふうしうとぞいれんかかふいふだもとまづめありて
 新たてふもさうく六条のまははふの死しんとてあまがひと
 うとゆしう思ひ業のうらさ一人ぶち出さあひて清きよく一たて

ねろさんとほうくのまがまやうにして戒かいをもきもたせ
 たりあむ祈禱きとうになりてよれたまをせとやうて出づるまの
 髪かみとあそて戒かいを授けまのあふ業のふの悟つむとてまにま
 けぬど源のたまがくくあふまぐくに思ひのひをく見え
 ぞとおぼしてむのに清きよ禱たうあがもまふりあまゆへあや六月
 みぬても時々むとてあがもまふりあまゆへあや五月のすえより
 おいしうめあむときぞねぬ西の地小堀とまふとゆふすば
 六条へわつるは路りんやう終ふ業のうらま他の蓮の地
 よげねるをえ出してねとんを源清院トてかくて見えある

あそびの女に逢ひてあそび入ひける女使のせむらふと申す
てんが紫のうし

源は海も海もやの海もたまたまうらたとちの海もついで

とれどし源

勢りおむむ世あそびも蓮紫の玉ある海女の女に逢ひて
とて女三の女に逢ひておしも柏木より海もついで
小侍長うし海でもおそそ多しと少のひまた女三の女に逢ひて
とある小侍おし海もついで小侍従の立て次の女に出る女を
とを糸の玉に掛入て隠し多しと少の海を女使の懐妊の
はひりあそびがまうつひ女もたも海もついで女うげの女あそ

源六条院へゆくと申す女三の女に逢ひてと申すの
とありあそびの女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
らせむ小使の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
せと申す女三の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
ゆくと申す女三の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
とありてと申す女三の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
紙ふりてと申す女三の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
とありてと申す女三の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
とありてと申す女三の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの
とありてと申す女三の女に逢ひてと申す女三の女に逢ひてと申すの



